第78回　史跡めぐり

昭和52年4月24日（日）午前9時15分
北越谷駅東口（足利銀行前）集合

コース　越谷〜金乗院〜岩名洞くつ（古墳）〜
清水公園〜博物館〜越谷

会費　五百円（交通費他）

発表者　木原徹也氏

越谷市郷土研究会

野田市といえばすぐに醤油を思いうかべるほど野田と醤油業との関係は深く、野田市は醤油工業と伴に発展してきた都市といえる。

ことに近世の野田市の歴史は、醤油造家の歴史をぬかしては語れない。

例えば、現在の野田市の街づくりの骨子となっている、鉄道事業、金融機関、上水道、各種教育施設、病院、公園等々の社会施設は、直接あるいは間接に醤油造家が創立し、又は育成したものである。

このように特異な発展をした野田市であるが、下総台地の西北部に位置し、台地に海の入り込んだ当時の地形は、人の生活するのに適応していたためか、野田市付近での人間の生活の歴史は古い。

最も古いところでは、一万年以上前と思われる無土器時代の遺物が市内から何点か発見されている。

次の縄文時代の遺跡（貝塚）は市内各所に豊富に分布しており、狩猟・漁猟を中心とした縄文人の生活の場として大いに栄えたようである。

この後時代の変遷とともに発展をあったようであるが、

「康正元年（一四五五年）閏六月十八日、成氏は総州葛飾郡古河県こうのすと云所に屋形を立、関宿の城に築固を籠。野田城に野田右馬助を籠置……」（鎌倉大草紙）とあり

この前後より、野田あるいは野田氏が歴史上に現われる。

また、野田郷の領主某が醤油を始醸し、甲州武田氏に納め「川中島御用醤油」となったとの言い伝えもある。

さらに「天正十八年（一五九〇年）関部内膳正長盛上総下総のうちにおいて一万二〇〇〇石をたまわり下総国山崎に住す……」（寛政重修諸家譜）とあり、この頃より本格的な町の形成がおこなわれ、以降、幕領、旗本知行地となり郡代の支配が続き、明治維新を迎え、現代へと続くが、この間江戸中期以降は醤油醸造は農間醤油造りから脱皮し、造醤油仲間を結成し、商業資本による本格的事業となり、当時既に現在の野田市の原形はほぼ出来上っていたと思われる。

以上の他野田市の歴史を物語る口碑として、

○「鳩鳥の可豆思加和也を饗すとも　その変しを外に立てめやもこ（万葉集巻十四）

で有名な葛飾の地の一画に野田の地が位置するとの考証から

右の歌碑が野田市中根八幡にたてられている。

- 鎌倉権五郎の目洗い池の伝説（平安時代）
- 野田市桜台高梨家の遠祖の野田移住（〃）
- 醤油造家高梨家の遠祖の野田移住（〃）
- 親鸞上人手植えの菩提樹（鎌倉時代）
- 西念の開基になる西念寺（現長命寺）の創建（〃）

また、野田市と越谷市と関係のあるものとして、野田市清水八幡神社に伝わる「バッパカ獅子舞」がある。これは伝承によると、元禄六年（一六九三年）七月武蔵国西新方領下間久里村の住人荒井平兵衛より伝授を受けたものといわれている。

この他、増森の東正寺、観音寺、中島の正福寺、増林の宝蔵院、向畑の千蔵院はいずれも野田市清水の金乗院（後述）の末寺である。

清水公園

野田市唯一の名所として、四季園内の桜樹やつつじ、又もみじ等の名木は、共に近郷近在に著名である。

この公園は、明治二十七年一月野田醤油造家柏屋五代主茂木柏衛（七郎右ヱ門）が、金乗院より千円の借地料前納を以って五千五百余坪の地を五十年間借り受け、救民事業を兼ね造園工事を行ったもので、同年四月三日開園式を行い、後一般町民に開放され今日に至っている。

その名称も、はじめは同園維持のため結成された茂木家一族の無尽講「聚楽講」に因んで「聚楽園」と称したが、後いつとはなしに地名を冠し「清水公園」と称されるようになっている。

現在境域内には昭和四十六年以来「乗物公園」が設置され児童達に喜ばれている他、その側に昭和四十六年十二月、流山市に残存しておった寛政時代の建築と推定される旧小金牧土の旧宅「花野井家住宅」（重要文化財）の復原移築なども行われ新たな名所になっている。

更に最近同社によってアスレチック・コースが作られ、若人の間に人気を集めている。

また付近には、市営野球場、市営陸上競技場等の体育施設

も作られている。

二 野田貝塚

清水貝塚とも云う。清水公園入口に広がり、千葉県指定史跡でもあり古くから有名な貝塚である。

この貝塚については、まだ十分な調査はなされていないが、縄文時代後期の遺跡で地下三〇cmから六〇cmに二〇cmから一mの貝層があり、出土遺物としては各種縄文土器や石斧、石鏃、石棒などが縄文淡水貝類、獣骨などとともに出土している。

現在では、付近の開発により大分判り難くそっぽが、まだ畑中に貝の小片が無数に散乱しているのが見られる。

三 旧花野井家（重要文化財）

もと、花野井四郎氏の住宅で流山市前ヶ崎に所在していたが、昭和四十六年十二月野田市が寄贈をうけて、清水公園内の桑物公園に隣接したこの地に移築したものである。

花野井家は、近世に入っては小金牧で牧を管理する牧士を世襲した家柄である。

建物の建造年代は、その様式から多おそらく十七世紀を下らないものと推定される。

その規模は桁行八間、梁行四間半で、向って右に床敷の部屋五室を設け、左手に土間を付けた直屋型の住宅である。

四 金乗院

宗派　新義真言宗豊山派三宝院末　慈光山能延寺金乗院

本尊　薬師如来（秘仏）

建物　（本堂）木造瓦葺平家八十五坪（庫裡）木造瓦葺平家八十一・七坪

（書院）五十七坪　（鐘楼堂）二×二間

沿革

（仁王門）間口五間奥行三間（中門）間口三間奥行二間

永享二年（一四三〇年）の創建、住職法印覚秀の開山という、天明二年（一七八二年）十二月焼失し、第十九代法印良慶代に再造、更に明治十二年八月第二十八世清水実尚建営し為て今日に至る。天正十九年（一五九一年）十一月徳川家康より御朱印として高五石余拝領

の墨付当時の住職祐心上人へ下賜される。なお、境内の不動堂には、安政六年（一八五九年）？に奉納された、タテ六〇cm、ヨコ九十三cmの額が残されている。

仁王門の伝説

仁王門は寛政時代に再建しているが、建設にまつわっての話しに当時、請負大工の棟梁に反感をもつ者があって、仁王門の柱を一本寸足らずにしておいて困らせる陰謀を企てた者があったが事前にこれを察知した棟梁は、ひそかにその柱に合わせて石の台を準備しておき、建前には、直ちに、この石台をつぎたして完成させることができたので、この策謀は見事破れたという逸話がある。

いまも、なお柱の一本にその証拠の礎石が遺されている。

五岩名洞窟

この洞窟について、千葉県野田郷土史には「岩名洞窟は、野田市岩名字小室の蔵王権現にあります。洞窟の深さは七尺、面積二坪五合余で、享和二年（一八〇二年）同村、前原、杣取五郎左衛門が杉木伐採の為、同所に来ると風のまにまに林間中に怪しい音がする

その音を便りに探ってみると、大杉の倒れた根本の地中に大穴があることを発見したので、発掘してみると、この洞窟であったのです。その内部には人骨、石鏃等があったので、里人が相計って、一字を建立して出土品を納め、泉州御嶽神を勧請して、蔵王権現としたものであります。洞窟は城砦の址とも、古墳とも云われています。

なお、洞窟の西方一町に廃墟の跡がありますが、これは小室山海福寺であって、今梅郷山崎所在の海福寺（岡部長盛がその生母のために創建した寺。掩蔽月宮院殿庵宗信大姉淑霊 慶長九甲辰七月十三日歿の墓碑が現存している。）の遺跡であります。」とあるが、その後の調査でこの洞窟は古墳であることが判明しました。

現在は、玄室の天井が抜け落ち、内部の石組を良く見ることが出来る。蔵王沼に面した台地のへりの杉木立の中で、ほとんど訪ずれる人もなく、ひっそりしている。

六 野田市郷土博物館

位置 千葉県野田市野田三七。

敷地面積 四、九五〇㎡

建物面積 四二八㎡

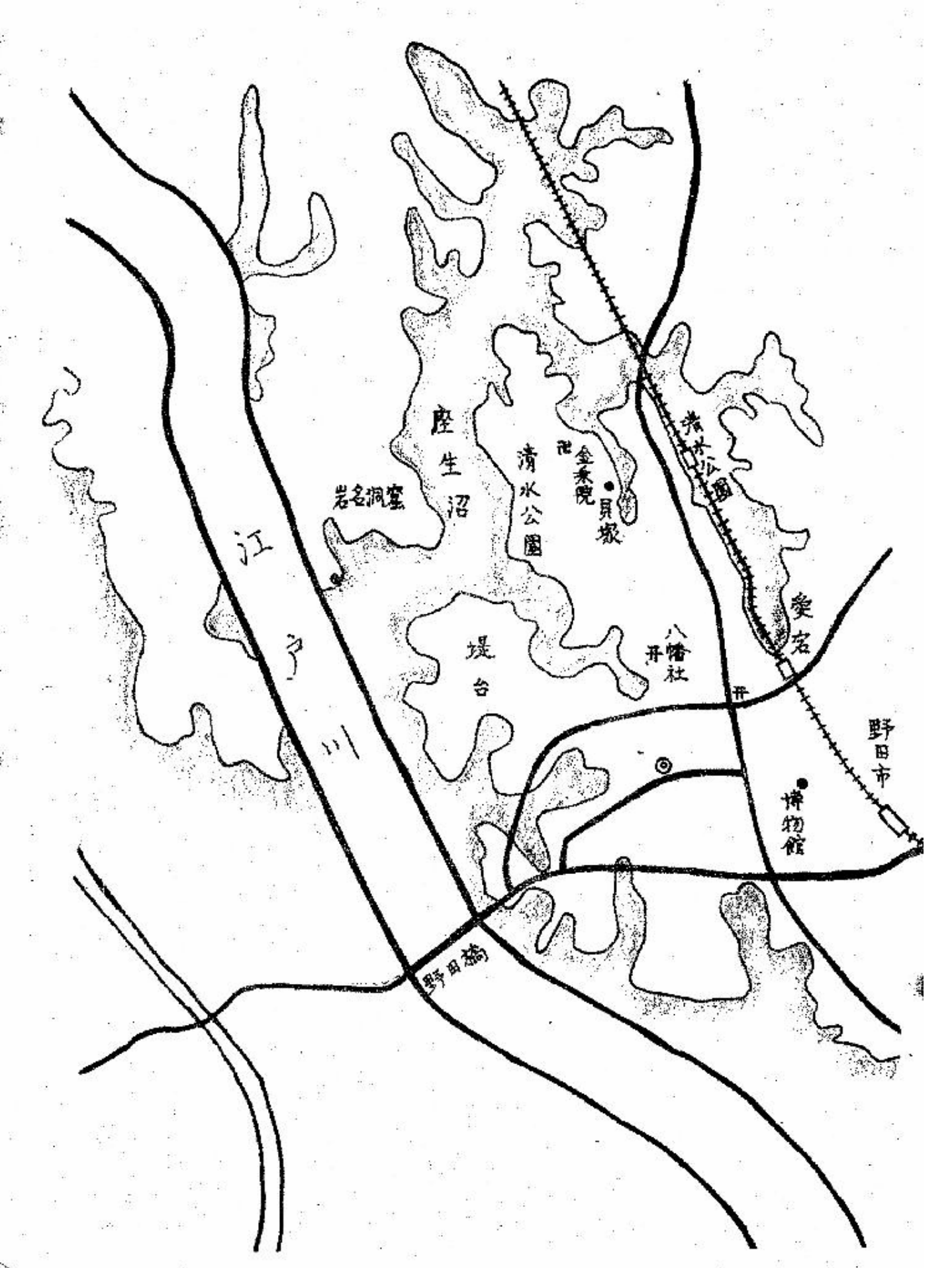
構造 鉄筋コンクリート造

本館展示室・整理室 延 三七八・二㎡

作業室・研究室 三三㎡

この小冊子を作成するにあたって左の資料を参考としました。

- 千葉県野田郷土史　市山盛雄著　長谷川書房
- 野田文化才一集から才十八集のうち特に
  - 才一集　野田地方兵戦史料集成　野田地方文化研究会刊
    - 附　野田城主野田右馬助について　野田地方文化団体協議会刊
  - 才八集　提台城主岡部長盛公事跡史料集　野田地方文化団体協議会
- 野田シリーズ　I　〜　VIII
- 野田市宗教施設総覧　野田市史編さん委員会
- 稿本野田市年表才一巻〜才三巻　同右
- 野田地方口碑伝説歌謡資料　同右
- 野田旧三十六ヶ町村史　同右


江戸川
岩名洞窟
座生沼
清水公園
金乗院
貝塚
清水公園
堤台
八幡社
奥宿
野田市
博物館
野田橋